

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

小林武史 音楽家&音楽プロデューサー
Takeshi Kobayashi / Musician & Producer



CREATOR^{No} INTERVIEW 91

小林武史 Takeshi Kobayashi

山形県新庄市生まれ。5歳でピアノを始め、20歳頃からスタジオミュージシャンとして活動始める。1980年代から日本を代表する数多くのアーティストのプロデュースを手掛け、1990年代以降になると、映画と音楽の独創的コラボレーションで知られる『スワロウテイル』『リリイ・シュシュのすべて』など、ジャンルを越えた活動を展開。2003年には「ap bank」を立ち上げる。自然エネルギーや食の循環、東日本大震災の復興支援など、様々な活動を行うなかで、2017年には復興支援の取り組みとして、宮城県石巻・牡鹿半島を中心とした「Reborn-Art Festival 2017」を開催。述べ51日間行い、大盛況のうちに終了した。2018年4月4日に、東京メトロのCM楽曲を中心に収録したワークスアルバム『Takeshi Kobayashi meets Very Special Music Bloods』をリリースしたばかり。

今の時代、
野太い命との出会いが必要。

TOKYO
billboard
LIVE
History



No. 91 小林武史 音楽家 & 音楽プロデューサー
TAKESHI KOBAYASHI / Musician & Producer

クリエイターインタビュー

『都市で感じたことのない生命観をアートで表現してみる』【前編】

photo_mariko tagashira / text_nanae mizushima

数え切れないほどの名曲を世に送り出してきた日本屈指の音楽家・小林武史さん。近年、小林さんは音楽を軸としながらも、アート、デザイン、食、農業など多様な領域を横断し、新しい出会いや価値観を提供してきました。六本木もまた、多様な文化を内包した街。小林さんの視点で見る都市の可能性とは何か？ それは現代の社会の合理性からこぼれ落ちる自然、営み、生命観につながっていきました。

若き頃の知的好奇心を満たしてくれた六本木。

六本木は、時代とともにかなり変貌を遂げてきた街だと思います。僕が最初に印象に残っているのは 1960 年代の六本木。当時の六本木と言えば、隣町の飯倉片町にあるイタリアンレストラン「キャンティ」が有名で、さまざまな文化人が集う大人のサロンとして憧れの場所でした。常連客のなかにはまだ 10 代だったユーミンがいて、ユーミンはその「キャンティ」での交流が、デビューにつながるんです。僕自身はユーミンより少し下の世代で、下北沢や三宿界隈で遊ぶばかりで六本木はまだ遠い存在でしたけど、その飯倉片町を含む六本木の知的なムードやカルチャーは肌で感じていました。

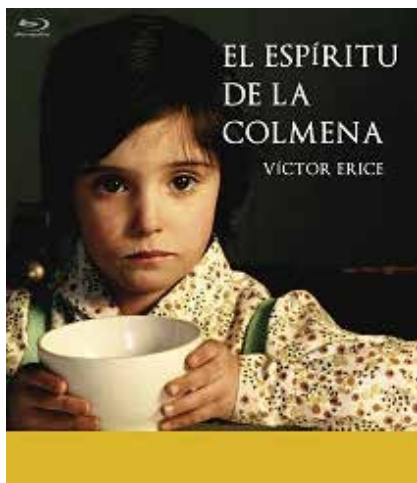
その後、六本木は多国籍なカルチャーが入り混じりながら、ちょっと猥雑な部分が強くなっていきましたけど、80年代に入ると、「六本木 WAVE」(以下 WAVE)とその地下にあった「シネ・ヴィヴアン六本木」(以下シネ・ヴィヴアン)の存在が新しい六本木カルチャーを生み出していった印象があります。

僕自身、その頃からスタジオミュージシャンとして活動を始めているんですが、WAVE やシネ・ヴィヴァンの入ったビルの上階にあるレコーディングスタジオ、「セディックスタジオ」に出入りしていたんです。よくスタジオを抜け出しては、WAVE で CD や本を買っていましたね。そうやって気分転換をして、スタジオに戻って再びレコーディングして、最後はシネ・ヴィヴァンで1本映画を観て帰る。そんな流れが定番になっていたと思います。

僕はシネ・ヴィヴァンの会員でした。ビクトル・エリセ監督の名作、『ミツバチのささやき』や『エル・スール』とか、さまざまなアートシネマを観るようになったのも、シネ・ヴィヴァンがきっかけです。とにかく知的なことに関しては、かなり満たしてくれるものがありました。

「シネ・ヴィヴァン六本木」

1983年開館。「六本木 WAVE」開業と同時にオープン。第1回上映作品は、ジャン＝リュック・ゴダール監督の『パッション』。ゴダールと言えば、トリュフォー、ルイ・マルらと並び、ヌーヴェル・バーグ(フランス語で「新しい波」を意味する)の旗手として知られている。その後もヨーロッパを中心とするアートシネマを上映し、日本のミニシアター・ブームの火付け役的な役割を担う。1999年に閉館。



ビクトル・エリセ監督

スペイン出身の映画監督・脚本家。1973年に発表した『ミツバチのささやき』が圧倒的な評価を集め、日本でも繰り返しスクリーンで上映されている。その後、長編作品としては『エル・スール』(1982年)『マルメロの陽光』(1992年)を発表。その他にオムニバス作品などで短編を発表しているが、長編がわずか2作のみということもあり、寡作な監督として知られている。

発売元：アイ・ヴィー・シー

価格：DVD¥3,800+ 税 Blu-ray¥4,800

平均化する街への懸念。

ちなみに「セディックスタジオ」の廊下では、小室哲哉さんとすれ違ったこともあります。80年代後半の話ですね。その頃の六本木と言えば、夜な夜な営業しているロックバーみたいなものも多かったですし、芸能プロダクションも六本木から飯倉町周辺にかけてたくさん点在していました。

こうして振り返ってみると、六本木という街は夜の印象が強いですね。良い悪いは別として、尖っていてワイルドでした。でもそこから大きく転換していったのが、やっぱり六本木ヒルズや東京ミッドタウンがオープンしたあたりからではないでしょうか。デザイン、アート、ファッション。その頃から六本木という街はソフィスティケートされていき、今は昼の見所もたくさんある街になりました。例えば最近では森美術館で行われていたレアンドロ・エルリッヒ展（『レアンドロ・エルリッヒ展 見ることのリアル』）。子どもにもすごく人気で、昼間に家族連れで六本木を散策している姿も当たり前の風景になっているように感じます。

六本木が昼夜、世代を問わず、多くの人が集う街に変貌することはとてもいいことだと思います。と同時に懸念することがあるとしたら、それは多くの発言の中から最大公約数を出すかのように、街のすべてが平均化したおとなしい街になってしまうこと。それはすごくもったいないような気がするんです。



『レアンドロ・エルリッヒ展 見ることのリアル』

レアンドロ・エルリッヒは、1973年ブエノスアイレス(アルゼンチン)生まれ、同地在住の現代アーティスト。日本では金沢21世紀美術館に恒久設置された「スイミング・プール」の作家としても知られている。森美術館で2017年11月18日～2018年4月1日まで開催された『レアンドロ・エルリッヒ展』では、新作を含む44点の作品を紹介し、その8割が日本初公開。入場者数は森美術館の歴代2位となる61万人を記録した。

『建物』2004 / 2017年

撮影：長谷川健太 写真提供：森美術館

Courtesy: Galleria Continua



小林武史 音楽家 & 音楽プロデューサー

TAKESHI KOBAYASHI / Musician & Producer

photo_mariko tagashira / text_nanae mizushima

" 極端なもの " が時代や文化をつくる。

今はコンプライアンスや安全性の問題とか、いろんなリサーチが行き届くにつれ、あまり振り切れたことができなくなっていると思います。そういったなかで、六本木をあらためてどんな街にしていきたいのか。その可能性を探るのは、とても意味があるような気がしています。というのも、本質的に時代や文化をつくるのは、" 極端なもの " から始まると思うからです。

それは音楽にも当てはまります。マスの論理から逆算して作られる音楽というのがあります。それはいわゆる最大公約数から導かれた平均化した音楽ですよね。もちろん僕自身、マスのあり方はどこかで意識はしています。けれど、もともと音楽家としては暗いところに入っていくのも好きですし（笑）、音楽の本質はそうした細かなディテールから生まれるものです。つまりハイ & ロウ、極端な部分が両方欲しいし、どちらもあったほうがいい、それは作品としても精神的にも。

極端と言えば、音楽家である僕が農業をやっているということが極端に見えるのか、六本木ヒルズにある J-WAVE (81.3FM) の番組に出演すると、必ずナビゲーターの方に「小林さんは今、千葉で農業をやっているらしいですね」と、言われるんですよ。どの番組に出演しても必ず言われるので、触れずにはいられないんだなって思っているんですけど（笑）、例えばこの農業という手段を用いて、東京のまん中で酪農を試みたらどうなるか考えてみるのもおもしろそうです。

J-WAVE (81.3FM)

1988年から1989年にかけてJ-POP(Jポップ)という新しい音楽ジャンルと名称を定義・新造し、それを定着させたFM局としても知られている。2003年に西麻布から六本木ヒルズ森タワー33階に移転。小林さんは、2016年3月から2017年3月まで、J-WAVEの日曜22時からの番組「Hitachi Systems HEART TO HEART」のナビゲーターを務めていた他、「GOOD NEIGHBORS」、「THE HANGOUT」などにゲスト出演を果たす。



「kurkku fields」

ap bankをはじめから環境やエネルギーの問題を考える中で、新しい生活や暮らしの選択肢を提案する実践の場として、2005年に「kurkku」を立ち上げる。2010年に「農業生産法人株式会社耕す」が開墾し、有機農産物や鶏卵の生産を実施している農場内に、食の一次産業を基盤にした、楽しさ、美味しさ、気持ちよさを共有できる施設「kurkku fields」のオープンに向けて、現在準備を進めている。

"都市型で生きる"、"地域型で生きる"という価値観はもう古い。

それこそ都市と酪農こそ極端な組み合わせと思うかもしれませんが、でもソフィスティケートされてきたこの六本木という土地のなかに、自然の野太いところと結びつく準備や下地はあるのかどうか、チャレンジしてみたいと思う自分がいるんです。「食を自給しましょう」とか、そういう優等生的なことではなくて、地続きの人やモノも飛び越えて、極端なコラージュを起こした先の現象にこそ、きっと可能性がある。

そもそも、これからの時代、特に都市ではそうした野太い命との出会いをすることが大切なような気がしています。そのうえでその出会いを都市で起こすとするなら、東京ではやっぱり六本木が一番似合う感じがしませんか？それは六本木という土地が育ててきた尖った精神、遊び心があるから。もっと俯瞰してみると、野太い命のある自然豊かな地方と都市は、完全に分けられる時代ではないと思うんです。「都市型で生きる、地域型で生きる」という価値観も、これからどんどんなくなっていくのではないのでしょうか。何よりITの発達によって地方と都市の距離が縮まりましたし、僕自身も相当に駆使して仕事をしています。

ITと言えばよく「AIの発達によっていずれ人間の仕事は奪われる」と言われていますけれど、僕自身はあまりそこに不安は感じていません。逆にもっと人間の本質的なことが見えてくるような気がしていますし、むしろそういうAIのような時代になっていくときにこそ、自然を同時に持ち込んでいけたらいいのではないかなと思うんです。極端と思われるものを混ぜて、つないでいくこと。つまり僕自身が触媒のようになればと、願っているのかもしれない。



小林武史 音楽家 & 音楽プロデューサー
TAKESHI KOBAYASHI / Musician & Producer

photo_mariko tagashira / text_nanae mizushima

アートの語源はラテン語の "Ars"。それは "生きる術"。

自然といえば、根源的には人間もまた自然の一部ですよ。最近よく思うのは、僕たちは人間であると同時に、地球上のあらゆる自然の営みの一部なんだということ。人間と動物、人間と自然と切り分けるのではなく、全体の営みから考えていくと、何かこれから必要なことがいろいろと見えてくるような気がするんです。その営み自体をおもしろがるというか。

とはいえ、じゃあ突然「自然を味わってみなさい」と言われても難しいでしょう。そもそもみんな日々の「現実」に必死でそれどころではない。そういうなかで営みのおもしろさに気づいたり考えたりするには、何かしら装置のようなもの、トリックや企みが必要だと思うんです。

その装置のひとつとして、アートは有効な手立てだと僕は信じていて、昨年、「Reborn-Art Festival 2017」という芸術祭を宮城・石巻、松島湾エリアを中心として51日間開催しました。構想したのは東日本大震災後、2、3年経った頃のことで、『大地の芸術祭』や『瀬戸内国際芸術祭』から、ヒントを得ながら具現化していきました。

僕自身がこの芸術祭で一番大切にしたいのは、東北の生きる力。まさにアートの語源はラテン語の Ars。「人が生きる術」を指します。一度は多くを失ってしまったけれど、誰かが本気でこの地と向き合わなければならない。それも東京をはじめとした外部の大きな力によって東北を蘇らせるのではなく、内側にもともと備わっていた生きる力を引き出し、蘇らせたかったんです。そして一度きりのイベントとか単発的なことではなく、もう一段踏み込んだ先の "環境をつくる" ということ。その覚悟を持って、「10年続けていこう」という思いで「Reborn-Art Festival」は考えているんです。



Reborn-Art Festival 2017

2017年7月22日～9月10日の51日間、宮城県の牡鹿半島、石巻、松島湾を舞台に繰り広げられたアートと音楽と食の祭典。国内外で活躍する現代アーティストの作品展示や多種多様なプログラムを行った。並行して7月28日～30日の3日間は、『Reborn-Art Festival 2017×ap bank fes』を開催。Mr.Childrenをはじめとする豪華アーティストが音楽ライブを開催した。
<http://www.reborn-art-fes.jp>

名和晃平

White Deer(Oshika),2017

©Reborn-Art Festival photo 後藤秀二

ひとりひとりの語られない物語、「INSIDE OUT」

震災から7年が経ちましたけれど、7年経った今だからこそ出てくるネガティブなことも、現地にはあります。仮設住宅が取り壊されることで、人のつながりが断たれて心の拠り所を失う方も多いですし、こんなはずではなかったという焦りや不安を抱えている方もいる。そういった現実を目の当たりにすると、アートのマインドで物事を考える前に、医療の必要性にも迫られます。

それでもアートができる役割、可能性を感じながら、この場で生きている、生きていくという生命感、実感をもたらしていきたい。そんな想いで「Reborn-Art Festival」で行ったプロジェクトのひとつに、フランス人のアーティストJRとの「INSIDE OUT」があります。

「INSIDE OUT」プロジェクトはJRが2011年から始めたアートプロジェクトです。大都市から紛争地帯までさまざまな場所で、そこに住む人々の顔写真を大きく出力して張り、ひとりひとりの語られない物語を街に映し出す試みですが、今回「Reborn-Art Festival」では、写真撮影室付きのトラックで牡鹿半島や市街地を巡りながら、そこに住んでいる人の顔を集め、街中にペイスティングしていきました。

ここで私は生きている。「INSIDE OUT」はこれ以上ない等身大の声を発していると僕は捉えました。その声は、現代の社会の合理性からこぼれ落ちたり、疎外されたりするものかもしれません。でも本質的にアートとはそういうもので、人はそういうものにこそ共鳴できるし共振できる。そういう未来の方がおもしろいと僕は思います。実際、「INSIDE OUT」は周囲の環境と共鳴しながら、ひとつの生命観を発していました。その生命観こそ、野太い命。先ほどから話していた「自然」だと思うんです。



JR

フランス出身、1983年生まれ。現在、パリとニューヨークを拠点に世界中で活動し続ける活動家。世界各地で弾圧や貧困、差別のもとで暮らす人々を撮影し、それを現地の人たちと壁に貼る活動を続けている。2012年には、世界的に行なうプロジェクト「INSIDE OUT」プロジェクトの一環として、ポートレート撮影用のカメラと大型プリンターを装備した専用トラックで東北の被災地を巡回、人々を撮影して街中に展示する活動を日本でも行い、話題を集めた。2013年東京・ワタリウム美術館でアジア初の個展を開催した。

音楽人として、越境していく。

このJRの「INSIDE OUT」プロジェクトを、六本木で行ったらどうなるでしょう。例えば「六本木アートナイト」の参加者のポートレートを撮影し、六本木の街にペイスティングするアートプロジェクトを「Reborn-Art Festival」とのコラボレーションで試してみる。東京を代表する都市に感じたことのない生命感が生まれて、何か都市の見方が変わる体験になったり、気づきにつながったりしていく。そんな媒介になればいいと思っています。

つながりといえば、今年7月、静岡の掛川で6年ぶりに「ap bank fes」をやります。「Reborn-Art Festival」をきっかけにずっと東北に通っていたでしょう。そこで培ったつながりをどう生かしていけるのか。それをずっと考え続けていたなかで、原点回帰として「ap bank fes」をやろうと決めました。地理的に静岡は日本のちょうどまん中でもあるから、ここから新しいつながりを生み出せたらという願いも込めて。

音楽でも芸術祭でも、安直に感動を求めて何かをつくることは非常に難しいです。言い換えるとそれは人間の自意識の扱い方でもあって、理想とするのは、自意識からどれだけ解き放たれて、「自然」という名の「必然」に向かっていけるかです。それは美しい建築が自然を模倣するかのごとく。何か楽しいときは、無意識に鼻歌を歌ったりするでしょう。あの感覚です。

誰かと何かが、誰かと誰かが、きちんと出会えるように。そしてそこで何かを生み出せるように。僕自身はこれからも触媒となっていきたいです。もちろんそれは「音楽人」として。作曲家のことをコンポーザー（composer）と言いますが、そもそもコンポーズとは、集められた素材を構成することですから。並べ替えたり、置き換えたり、つなげたり。ずっと音楽でやってきたことを、他のフィールドでもやっていく。そうやって越境していくことで見えるものがあるし、まさにそれが多様性でもあって、これからの時代、必要なことだと信じています。

（撮影場所：ビルボードライブ東京）



六本木アートナイト

2009年にスタートした、六本木の街を舞台にした一夜限りのアートの饗宴。六本木の街に、アート作品のみならず、音楽、映像、パフォーマンスなどを含む多様な作品を点在させ、六本木エリア全体を多様なアートで埋め尽くし、非日常的な体験をつくり出し、また生活の中でアートを楽しむという新しいライフスタイルを提案している。2018年は、5月26日(土)から5月27日(日)にかけて開催。「街はアートの夢を見る」をテーマに、街のあちこちにインスタレーションやパフォーマンスが登場する。

<http://www.roppongiartnight.com/>



ap bank fes

6年ぶりに、原点回帰となる静岡県掛川市・つま恋にて開催される「ap bank fes '18」。7月14日(土)前日祭も含め、15日(日)・16日(月・祝)の3日間の開催が決定した。第1弾出演アーティストは、Bank Band と Mr.Children。サステナブルな未来への想いや食・エネルギー・アートなど、さまざまな実感や気づきと出会えるフェスを目指す。

取材を終えて

「アートの語源はラテン語のArs。"人が生きる術"を指します」と、小林さんはおっしゃっていましたが、まさにアートとは美術館のガラス越しに観るものだけではなく、本質的にはひとりひとりの内側に備わっているもの。その内側に揺さぶりをかけるきっかけを、小林さんはさまざまな活動を通して生み出しているのだと、取材をしながら実感しました。

(text_nanae mizushima)